

## 浮上した首都圏の一般廃棄物埋立て計画

——波紋を広げる北海道幌延町の誘致の動き

処分場に狙われる砂の採掘跡

最北の稚内から南へ六〇kmほどに位置する幌延町浜里地区。この三月、首都圏で発生した一般廃棄物の焼却灰などを固化したのちに、同地区の砂採掘跡に埋立てようという計画が表面化して、全道に波紋を広げている。

人口約三三〇〇人、牛の数はその三倍という酪農の町・幌延の西に、浜里地区が広がる。日本海岸を稚内に向かってまっまぐ道道が伸び、砂丘林の東側には広大なサロベツ原野

や牧草地がつづく。利尻礼文サロベツ国立公園に隣接した浜里一帯は樺太引き揚げ者が戦後開拓で入植したが、厳しい気象と砂地という悪条件のために離農が相次いだ土地である。

一〇年ほど前には、町が低レベル核廃棄物貯蔵施設の誘致に名乗りを上げて、ここが候補地になった。八四年、核燃料サイクル基地の下北半島立地が決まると、その話は立ち消えたかに見えた。が、今度はもう少し内陸の同町開進地区が動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の高レベル

滝川康治  
フリージャーナリスト

核廃棄物の建設候補地として浮上して、全道を揺るがす大きな問題に発展している。

低レベル施設の誘致が空振りに終わった浜里地区は、道内でも数少ない良質な砂の産地。ここ一〇年ほど、まず泊原発の骨材に、つづいて一極集中により膨張する札幌圏の建設現場へ搬出され、乱掘跡が無残な姿をさらす。

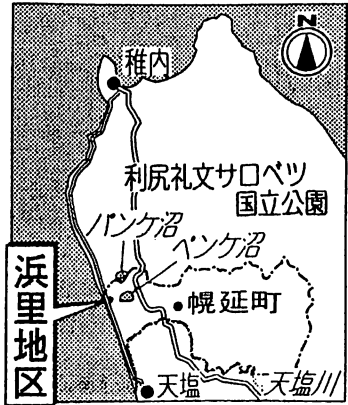
もともとこの地域は、七四年に国立公園に編入される予定だったが、東を流れるサロベツ川の改修計画との絡みで見送られた経過がある。そ

のことが、砂の乱掘や廃棄物処分場などの呼び水になった。多くが原野のために農地法が適用されず、事業者寄りの砂利採取法の下では跡地が十分に復元されることもなく、自然公園法の地域外のために環境保全上の網もかぶせられない——浜里一帯の砂の採掘跡は、一〇数kmにわたって満身創痍の状態だ。

「リサイクル事業」の名目で…

そこに持ち込まれたのが、首都圏で発生する一般廃棄物の燃却灰など

●コミレポート



を固化して、「リサイクル材」として採掘跡地に埋立てよう、という計画である。「コンクリートリサイクル事業」と銘打った計画は、次のようなものだった。

首都圏の自治体から搬入される焼却灰や破砕選別後の残渣などを原料に、セメントや硬化材などを混入して軽量コンクリートを浜里の砂採取跡地で生産する。このコンクリート製品は、採掘跡の埋め立て材に利用するほか、花壇のブロックや酪農家の舗装資材にも用いる。焼却灰などは東京湾から積み出され、稚内港に荷揚げして現地に運び、その搬入量は年間五万tから一〇万t。コンクリートにするまでの経費は首都圏の自治体が負担し、事業を推進する現地法人は町も出資する第三セクターとして設立。生コン工場に似た施設では五人前後を雇用して、今年八月にも操業を開始する——と。

理事者は、事業のメリットとして「埋め戻しによる環境美化と地域の再開発」「税收や雇用の確保」「相手自治体への産物の優先直売と人的交流」を挙げた。これを「地球環境改善サミット事業」という前宣伝で、着々と議会対策を進めていた。三月初めの話である。

この誘致話は、幌延が初めてではなく、すでに昨年暮れ、隣の豊富町に持ち込まれていた。町営の大規模草地牧場が、固化した焼却灰の埋立て候補地に挙げられた。菱田房男豊富町長は、次のように経過を語る。

「宇都宮の大谷石を採った跡地に固化した物を埋めるとい話を業者から聞いて、『環境的にクリアしているならいいだろう』って単純に考えました。牧場の深い沢に牛が落ちたら困るし、酪農家の環境整備をするにも町に金はないしで、『これはいい』と一時は思いました。でも、ダイオキシンの問題もあるし、相当の

施設をするには町で（費用の）持ち出しはできないし……。内部で検討したけれど、いい答えが出てこない。そのうち、相手もしびれを切らしたようで、幌延の方に話が行ったようです。」

同町の議会関係者によると、業者の打診には伏線がある。

昨年七月、温泉と酪農の町・豊富は、サイクルスポーツで地域おこしを狙って全国初の「自転車健康都市宣言」を行なった。その過程で日本自転車振興会とのつながりができ、同会サイドからゴミ処理計画の話が出てきたとか。つづいて、東京都三鷹市の廃棄物処理業者が現れ、迷惑料として一億円を町に支払うことや、今年三月末までの会社設立を持ちかけたたりしていた。その際、幌延町の理事者が議員に対して説明した資料と同内容のものを示した、という。過疎地の弱みに付け込むようなやり方だった。

### 道の難色で仕切り直しに

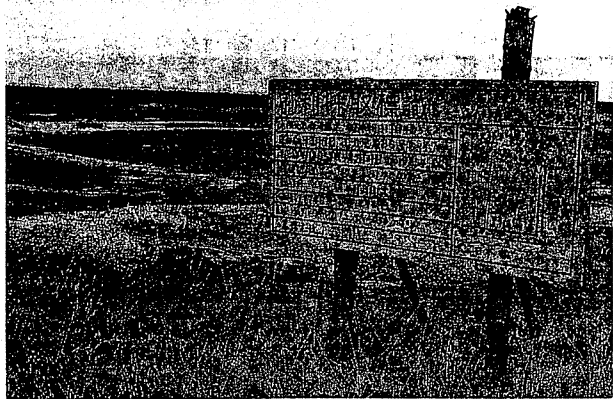
幌延町の理事者や議会の有力者は議員に箱口令を敷いて第三セクターの設立準備を進めていたが、三月九日、道内紙に報道されることとなり、全道に波紋が広がった。

隣接する豊富、天塩の両町は砂の採掘跡へのゴミの埋立てに懸念を表明し、地元の保健所が事情聴取に乗り出した。計画は水面下で進められており、道が公式に事情を聞いたのはこれが初めてだった。

同二三日の道議会予算特別委員会。道の栗村幸雄保健環境部長は、首都圏の廃棄物持ち込みについて「市町村に対し廃棄物の減量化を進めている道としては、好ましいものとは考えていない」と答弁して、否定的な考えを示した。また、第三セクターについて「設立の前に、事業内容や計画の見直しなどを慎重に検討する必要があると（町に）申し上げた」

じっくりと調査研究する」と述べている。

「道は（首都圏ゴミ処理計画や動燃計画などで）うちの町が何をやって反対、『けしからん』と言うだけでは気楽なもんだ。（砂の採掘跡地を）五〇年、一〇〇年のオーダーで心配しなくていいのか。（固化した物を）埋立てた後で害があるんじゃないか。」



ゴミ処理計画がもち上がった幌延町浜里地区の砂採掘現場。

意味がない。リサイクル材として基準に合致するかどうかが前提条件だ。（跡地対策を）道に掛けあっても仕方がないので、首都圏から金やリサイクル材を引っ張り出してやらなければならぬ。」

五月の連休明けに幌延町役場を訪れて話を聞くと、上山利勝町長は道に対する不信任や跡地対策についてまくし立てた。私は、廃棄物施設を企業誘致のように考えることは反対だが、開拓農民として底辺の生活を熟知して、政治の修羅場をくぐり抜けてきた六五歳の町長のしたたかさを、ある意味では評価している。こうした過疎地の首長と処分場探しに躍起になっている首都圏の自治体や業者がある限り、いまは荒唐無稽のように見える処理計画も、いつか現実味を帯びてくるのではないか……。確かに、処理業者らによって幌延町に持ち込まれた計画は、かなり杜撰なものではある。

と、ブレーキをかける姿勢を見せた。焼却灰を固化したものをどう扱うかを巡って、道は「一般廃棄物」、町は「リサイクル材」と見解が分かれる。本州方面からの産業廃棄物の持ち込みを認めていない道としては、一般廃棄物だからOKとは言えないのは当然の成り行きだった。

当初、四月初めの臨時町議会で第三セクターへの出資を議決してもらった意向だった理事者側は、道の難色にあって、事を荒立てるのは得策でないかと判断してか、とりあえず事業主体の設立を見送ることに方針を転換。この計画は、いったん振りだしに戻った。

だが、決して計画をあきらめたわけではない。加藤良美助役は、四月発行の町広報のなかで「ゴミの有効活用はできないのか」と題して、「町では、この計画の是非を、法的な面から、公害の面から、化学的な面から、企業の面からこの一年をかけて

たとえば、焼却灰などを東京港から積み出す計画になっているが、廃棄物を考える市民の会（東京）の調査によると、搬出するのを認めたこととはないし、今後も認めないことが明らかになっている。たとえリサイクル材であっても、公共埠頭は狭いため土砂や砂利の類についても制限しており、計画にあるような五、一〇万トンという多量では、密かに搬出しようとしても無理だろう（都港湾局）——というのが、その理由である。

幌延町は持ち込まれる焼却灰について「厚生省の指定財団による無害検査もつき、安全性は保証されている」と胸を張ったが、首都圏の清掃センター関係者は「試料の計量証明書はあるが、『無害検査証』なるものは存在しない。事業を進めようとする者の願望を言っているのではないか」と話しており、基本的な事柄について町側の認識不足も目立つ。

現状では、道も首都圏からのゴミの持ち込みに消極的な見方を示しており、当初計画のままでは実現は困難視されるようだ。その半面、地元自治体が受け入れに手を上げているケースは全国的にも珍しいだけに、より細密な計画に姿を変えて実現の手立てを追求していく可能性もある。独走気味の町理事者に対して、住民側は「また、ゴミの話か…」と冷やかに見る人のほうが多いようだ。

処理計画が明るみに出てから、地元の地区労働関係者が「ゴミリサイクルを考える会」（本田正代表）をつくり、幌延と天塩、豊富の三町の一〇〇人を対象に葉書アンケートを実施した。対象の七割が幌延町民。「これまでの選挙や署名運動の結果を参考に、核廃施設に明らかに反対している人には葉書を出さなかった。意思のはっきりしない人の声を聞きたかった」（本田代表）と、その狙いを語る。

回収率は約二五％だったが、賛成は三通にとどまり、同会の予測に反して反対・慎重意見が大勢を占めたとか。「リサイクルには賛成だが、首都圏のゴミを持ってくるのには反対」「なぜ、いつも他町が嫌うことをするのか、町民として情けない」「住民の声を聞かないで進めるところに問題がある」といった文面が目立つ。

幌延町は、低レベル核廃施設に始まって、もう一〇年あまりも各種廃棄物施設誘致に力を入れてきたが、どれひとつとして実現を見ていない。一四人の町議のうち、核廃施設反対派は二人と少ない。その一人で、酪農業の川上幸男さんは「地元にあるものを生かして町づくりを進める発想が町に欠けている。今回の計画もメリットがないことは、住民は分かっていると思う。それでも『町がさびれているので、ゴミにでも飛びつかなければ』という同僚議員も

いて、情けない」と嘆く。核廃施設よりも首都圏のゴミ処理施設を疑問視する議員のほうが多い、とも話していた。

幌延の計画を取材して感じるのは、大量のゴミを生み出す大都市と、それを使って地域づくりを進めようとする過疎地のいびつな関係である。大電力消費地の需要を開拓するために原発が建設され、大量の砂が使われた。膨張する札幌圏の建設現場に供給するために、貴重な資源が食いつぶされた。動燃の核廃施設計画をも当て込んで、採掘業者が相次いで進出した。その結果、浜里の海岸線には砂の乱掘跡が生じて、一〇数kmにもわたって放置された。そこへ、今度は首都圏のゴミ処理計画が持ち込まれる……。問題の根っこは深い。原発城下町・福井県敦賀市のケースと似通っている面がある。同市に

は昨年度だけでも、原発建設用の碎石場の跡地に大阪や首都圏の二四自治体からゴミが持ち込まれ、埋め戻し材に使われた。年間持ち込み量は、同市で処理するゴミの十数年分にも上るとか。正式に幌延が処理施設の誘致に名乗りをあげるならば、敦賀の二の舞になることだってありうる。

二年前に六都府市廃棄物問題検討委員会が提出した文書によると、一般廃棄物最終処分場の残余容量は、埼玉県が本年度、東京都も来年度にはマイナスに転じ、横浜・川崎両市もせいぜい一〇数年後までの寿命という（榊田みどり「まだら模様の東京湾フェニックス計画」本誌第28号を参照）。北の果てで経済的に割りに合わなくても、幌延のようにゴミを引き受けてくれる自治体があれば大歓迎——というのが、首都圏側の本音ではないだろうか。

こんな記事が北海道新聞に載った。天塩町の幹部職員が昨春秋、四国で

開かれた環境庁など主催の「快適環境シンポジウム」に参加した際、懇親会で東京の一部上場会社の環境センター部長と同席した。「使用済み電池を保管しているが限界に近く、本州にはもう捨て場がない。天塩？幌延町の隣ですよ。お宅の町で受け入れてくれるなら、すぐにでも飛んでいきますよ」と部長氏。その職員は丁重に断ったが、「北海道は本州のゴミ捨て場としか映らないのか」と腹が立ったという（三月二十五日付道北版）。「快適環境」は東京の人のためだけにあるのか、という思いにかられたのは私だけではない。

幌延町のあるサロベツ原野一帯は、日本海に利尻富士の美しい山容を望み、エゾカンゾウやエゾスカシユリなどの花々が咲き誇る湿原や、アイヌ民族の祖先の人たちが豊かに暮らした擦文時代の遺跡群が眠る砂丘林などを抱く、国内に残された数少な

い自然が息づく地。その環境をみんなの共有財産として、地元の人々と都市生活者が自然を大切にした地域おこしに力を合わせるからこそ、いま求められているのではないだろうか。

少なく消費して捨てる物を減らし、発生したゴミは自分たちの目に見える地域で処理する——これが廃棄物問題を解決していく原則だろう。首都圏の人たちには、出したゴミの行方を注視すると同時に、外に出さない、地方の過疎地に押しつけないための行動と、そのネットワークづくりに取り組んでほしいものだ。

（たきかわ こうじさん）

西田好子・著  
**ほくは小さなごみ屋さん**  
映画『あゝす』映画化記念出版

ひたむきにバックカー車を蒸し、追いかける少年・順平君とお母さんの心揺る感動の書。  
●四六判上製本・270頁・1700円